The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人類学研究における人格と自己
Author(s)	中川, 理
Citation	年報人間科学. 2001, 22, p. 191-208
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人類学研究における人格と自己

中川　理

〈要旨〉

本稿では、人の概念についての人類学的研究の学説史を、人格と自己という概念の組に注目して整理する。これら二つの概念は、多様な地域やトピックを扱う研究を人類学として理解可能なものとするために必要な枠組みを提供してきた。この語りの枠組みを明示化し、現在における可能性を摸索することが目的である。

理論的争点を明確化するための試みとして、筆者は学説の流れを3つの局面の連続として捉える。(1) 社会的人格と心理的自己の対立を想定する「二重モデル」と、ロサルドによる、この対立が当てはまらない非西洋社会の分析によって、これを近代西洋の構築物として退ける立場の対立。(2) ロサルドとギアツに代表される解釈学的な人の概念研究と、彼(女)らの方法は実際には文化的規範の記述であり、人々による自己の経験を捉えていないとする批判の対立。後者の立場は、実は装いを新たにした「二重モデル」の再導入であると分かる。(3) 自己を変動する生産過程として捉え、責任あるエージェンシーの割り当ての文化的過程を分析する試みのあらわれ。このアプローチはまだ萌芽的段階にあるが、西洋と非西洋の二分法と内的自己の絶対化をともに乗り越えようとする批判的人類学の試みとして注目される。

キーワード

人格、自己、経験、エージェンシー、アンチパーソナリスト・アプローチ

1　はじめに

人の概念は社会とその成員についての文化的概念化の最も基本的なレベルである。人とはどのようなものか、心とは何か、精神と身体の関わりはどのようになっているか、人のふるまいはどのように理解されるか。これらの基本的な観念が文化によって（あるいは状況によって）異なるという認識は、人類学理論に前提されている社会・文化と個人との関係の概念化の根本に批判を投げかけ、再定式化を迫ってきた。この再帰的性格が、人類学批判によっていかがわしい他者化の言説とみなされ、独立した対象も方法も持たないこの主題が、人類学の中で持続的に重要視されてきた理由である。人格・自己の概念の理解は、人類学理論に内在する人格・自己の理解との対話において有意義であったと言えるだろう。しかし現在この主題についてどのような語りが可能であるのかは不明確になっている。

本稿では、特に重要と思われる人格と自己の概念にしぼって、この主題に関する諸文献を図式的に分析する。それによって、方法も用語の定義も様々であり、対象とする地域、トピックも多様な研究群が扱った問題の理論的焦点がどのようなものであったか整理し検討する。このような試みはそれぞれの民族誌的研究に対して還元主義の暴力をふるっているとの批判を免れ得ないだろう。しかし、少なからぬ用語的理論的混乱と曖昧さを拭い切れない現在の状況を考えれば、これは必要なステップであるだろう。とくに人格と自己という概念の組は、研究を人類学として「有意味なものとする」ために必要な枠組みを陰に陽に提供していると思われる。そのような枠組みの理論的含意を明らかにしたい。

2　人格と自己

2・1　はじめに

人格（person, la personne）と自己（self, le moi）という二つの基本的用語は、様々なやり方で用いられてきた。もし、各自の使用法の目録を作成してその違いと共通点を比べたとしても、得られるものは少ないだろう。しかし、幸いなことに、これらの用語が提出しようとする「モデル」に留意するならば、一定の共通性と対立点が浮かび上がってくる。我々が注目するのはそのようなモデルである。簡単に図式化しておく。一方に人格と自己を対立物と見なすモデルがある。「社会的」人格と「心理的」自己の差異を想定し、前者を人類学の対象とみなすか、あるいは、その上で両者の関係を考慮する。他方に、人格と自己の結びつき方の文化的多様性を追求するモデルがある。この立場は、対立モデルが想定する人格と自己の落差の普遍性を否定する。これら二つのモデルが提出された後の議論は、これらのモデルの修正と再定式化であった。

2・2　二重モデル

まず、人格と自己を対立的に捉える見方を整理しておこう。このモデルは、「人の概念」の人類学的研究のアイデアをはじめて提出したテクストである1938年の「人間精神の一カテゴリー：人の概念、自己の概念」の冒頭部分でモース（Mauss, Marcel）が提案した区分と限定から源を得ている。この箇所でモースが扱うのはもっぱら「法と道徳に関した」概念であり、普遍的と彼が見なす心理学的な自己意識を言語学的問題とともに対象から排除している（Mauss 1950 (1938)）。彼の研究からインスピレーションを得た人々の多くは、この分割に追随して、問題を「法と道徳」へと限定しようとした。

例えば、デュモン（Dumont, Louis）を見てみよう。彼は個人（individu）を次のように区別している。それは一方で「話し、考え、そして欲求する経験的主体」である。デュモンにとって、それはすなわち「どの社会でも見出される人類という生物種の一サンプルとしての個体」である（デュモン 1993 (1983)：41）。他方で「人間および社会についての近代イデオロギーにおいて見出される独立した、自立的な、したがって（本質的に）非社会的な、精神的存在」である。彼は前者を研究対象から排除し、理念と価値の集合と定義されるイデオロギーとしての「個人」を研究する。

カリザス（Carrithers, Michael）（Carrithers 1996）が示すように、「法と公的イデオロギーの問題として（as a matter of law and public ideology）」論は次のようなヴィジョンを与える。西洋社会は、「法と公的イデオロギーの問題として」、聖なる物とみなされる独特な個人に価値を置く。その一方で、社会的関係の価値やそれぞれの役割に特有の社会的義務の充足のような点に、「法と公的イデオロギーの問題として」、強調をおく社会がある。中国社会は少なくとも儒教倫理に支配されていた間はそうであり、また、多くのアフリカ社会は伝統的思考と実践に統べられていた間はそうであった（421）。この立場からは、法的・道徳的な義務、責任と権利の社会的配置に問題を集中することで、「話し、考え、そして欲求する経験的主体」（デュモン）を問題から排除できるとされる。

それに対して、モースの同じ提案から出発したフォーテス（Fortes, Meyer）は、対象の限定に満足しなかった（Fortes 1993 (1973)）。彼は、上のように定義された人格概念と、その外部に設定される心理的自己との関係を問題化しようとした。彼は次のように論じる。

人のカテゴリーは社会に由来しているのであって、「その社会に見出されるペルソンヌ・モラルを特徴づける特有の記号と指標と、それを構成する道徳的法的な様々な能力と性質を作り出し、定義し、実際のところ押し付けるのは社会である」（286）。しかし、その一方でフォーテスは、個人はそのような人の概念の受動的担い手と考えられてはならないと強調する。「客観的な側から見ると、社会が人に与える特徴的な性質、能力、役割が人格の認識を可能にし、また、公的に想定されている人格として自分自身を呈示することを可能にする。主観的な側から見れば、どのようにして行為者としての個人が自分が所与の状況と地位においてそうであるべきであると期待さ

れている人格であると、あるいはないと、知るのかについての問いである。」(287)。

フォーテスにとって、この問題は「個人と社会がどのように相互的規制によって結び付けられているのかという永遠の問題」(287)に関係している。そして、彼によると、この個人／社会の対立に、モースの区別した心理的概念としての自己(le moi)と法的倫理的概念としての人格(la personne)に対応している。ここでは、社会的役割のシステムとしての人格の背後にそのような役割を演じる自己の意識を理論的レベルにおいて対置している。このようにフォーテスは、モースの議論を構造機能主義的なモデルに回収している。

これはモースの議論に対する唯一の読みの可能性ではない。モースは論文の冒頭で、心理学的概念としての自己の概念を研究対象から排除し、法的倫理的概念としての人格に集中すると述べているにも関わらず、後半部では西洋的人格概念の特徴として心理的な自己意識に支えられた人格の概念を挙げている。ここにはねじれがある(Allen 1985)。曖昧さの結果、この、多くの研究のインスピレーションの源となっている論文は、もう一つの読みを許容する。この点は後で触れる。

以上述べてきたようなモデルを、自己と人格の二重モデルと呼べるだろう。このモデルは、「人の概念」の人類学的研究にとって厄介な問題を解決してくれるように思われた。なぜなら、心理的経験という厄介な存在をしかるべき場所に押し込め、「法と道徳」の問題に集中できるからである。

2・3　ロサルドの批判

ロサルド(Rosaldo, Michelle Z.)は、二重モデルの理論的前提をきびしく批判する(Rosaldo 1984)。公的象徴形態の分析によって現地の人々が自身を人としてどのように定義しているかを探るギアツ(Geertz, Clifford)の解釈学的視点を用いて(ギアツの議論については後述)、彼女はフィリピンのイロンゴットの人々の人の概念と感情について検討する。そこから、内的な自己(private self)と公的な人格(social person)を対立させる分析のフレームワークは、近代的自己のイデオロギーであり、二項対立は普遍的事実ではないと批判する。彼女の批判的分析は、人格と自己の関係について、人類学研究で用いられるもう一つのモデルの骨格を示している。[註1]

彼女は、イロンゴットの人の概念を次のように提示する。イロンゴットにおいては常数的な「私“I”」は存在せず、社会的文脈によって変化する(「今日姻族の一人として私に対したイロンゴットの男は明日には私の息子となるかもしれない。この違いは単に我々がどのように話すかだけでなく日常生活においてどのように振る舞うかやどのように感じるかまで描き出す」(146))。また、個人のパーソナリティの描写はまれであり、なぜだれかがあるやり方で行為したかの説明はほとんど常に公的政治的利害に言及し、個人的動機には帰せられない。「一般に、イロンゴットは意図を洞察せず、責任を追跡せず、違反者が彼の行為を通して他人に悪いことをしていたと「知って」いたかどうかを問うことで非難すべきかどうかを判断しない」(146)し、親族や友人の期待を満たすことができなかった理由

を説明しないし、また説明を迫ったりもしない。また、イロンゴットにとって「怒り」とは儀礼的支払いという社会的行為で償えるものであって、社会的規則に対立する内的状態とは考えられていない。つまり、彼らの自分が誰であるかという感覚は、狩り、首狩り、稲作といった一連の行為の中にすえつけられており、「自己」とその「呈示」の間には必ずしもギャップはない。

ロサルドは、このような民族誌的データをもとに、次の理論的主張を行なう。「私は、自己／個人と自発性、真正の、心からの感情、プライヴァシー、独自性、定常性、「内的」生活を等しいと見なす、そしてそれらをマスク、役割あるいはコンテクストによってかたちづくられる「人格」「ペルソナ」と対置する分析フレームワークは近代西洋的自己を構成する二分法の反映であると論じる。そしてこの場合「我々の」分割はイロンゴットの自己概念の構築を理解するための枠組みとしては誤解を招くものであるとわかるのである。」(146)

この主張は、我々を内面性の社会的構成の問題へといざなう。彼女は、「内的自己とは単に識別された沈黙である」とさえ言っている。社会的役割を受け入れ、反発し、呈示するような内的自己をあらかじめ理論的に前提することはできない。こうして、二重モデルでうまく処理されたと思われた「心理的経験」を再び考察の対照としなくてはならなくなる。

このモデルは、モース論文のもう一つの読みの可能性と対応している。先ほど述べたように、この論文の後半部で、冒頭の、心理的概念としての自己は扱わないという限定に反して、心理的自己意識が道徳的人格を保証する構図が、西洋の特徴となっていったと強調している。この部分を重視するならば、自己と人格の特定の配置が西洋の特徴であり、心理的なものと社会的なものの異なった関係が追求の対象となる。

2・4 問題の所在

人格と自己の概念の人類学的研究の理論的争点は、このように、「自己」と「人格」の関係をどのように捉えるかにかかっていると分かる。心理的なものと、社会的なものの関わりをどのような方法で、どのように理論化するかの問題は、この種の研究にとって躓きの石であった。そしてこの問題は、ごく初期の段階から民族誌的研究にあらわれていた。

レーナルト(Leenhardt, Maurice)の「ド・カモ」(レーナルト1990(1947))は、モース論文以降で人格と自己の問題をはじめて主題として取り扱った民族誌的研究である。この中にすでに上に挙げた二つのモデルの緊張関係が隠然と存在している。

よく知られているように、レーナルトの理論はモースの人格論とレヴィ＝ブリュル(Lévy=Bruhl, Lucien)の未開心性論の両者に基礎を置いている。したがって、「ド・カモ」のカナク人の人格概念の分析において、法的道徳的カテゴリーとしての人格のあり方は、心理的認識と対応しているように記述されている。つまり、関係的な、拡散した人格は心理の面では神話的思惟や「融即」として表現され

る。

しかし、他方で社会によって抑圧された自己のモデルが用いられている。レーナルトは非順応的な人々の行為、例えば親の認めた結婚相手を断って遠くの村へ旅立ち首長を口説き落として結婚した女性の例を挙げ、「彼女は自主性を持ったのである。彼女は、特定の部族の若い娘という役割（ペルソナージュ）が従わなくてはならない伝統に順応することを望まなかった。彼女は自分のことを自分で決定したのである。彼女は抗う運命に対して何度も戦わなければならなくなる。なぜなら社会は人が法に背くのをきらうからである」(278) と書く。「社会は人物が役割をきちんと果たさないと承知しないマネージャーに似て」(279) おり、それに抗する決断は、「一つの役を演じる人物ではなく心理的自我が一個の差異を確立した一人の人格（ペルソナ）の決断であった」(278)。ここでは社会と個人の対立構造は明らかである。

この記述のずれは、ロサルドの立場とフォーテスの立場の相違に対応している。イデオロギーだけに問題を集中するという実際には困難な限定から離れ、社会的行為の分析から「人の概念」を記述しようと試みる時、法的倫理的カテゴリーと心理的カテゴリーを明確に区分することは困難となる。レーナルトの研究は人の概念の経験的側面への関心の先駆けであった。この関心の増大に伴い、彼に見られた問題、我々がここまでで明確化した二つの異なったモデルの問題は再び中心的課題となった。

3　二重モデルの回帰をめぐって

3・1　はじめに

対立は、以下に紹介する議論では立場が逆転している。新しいパラダイムによる解釈学的研究によって描き出される人の概念の記述がどのような現実を描写しているのかが、その批判者によって問題視された。ギアツが「文化の科学的現象学」と呼んだ方法は、実は規範的文化概念の記述であり、真の自己の経験はそれに対立する。このような、解釈学的方法に対する批判が用いたモデルは、装いを新たにした二重性モデルだといえる。ここでは、人類学的記述による他者の生産が問題視され、「人々の主体性」の再評価が賭けられていた。いかにして他者と自己をラディカルに区別する言説から抜け出すか？批判はこの問いに対する一つの可能な答えであった。

ここではまず、ギアツの方法論と記述についてまとめる。その後で、彼に対する批判をまとめ、その問題点を検討する。

3・2　ギアツの解釈主義的研究

ギアツ (Geertz 1973, ギアツ 1991 (1983)) は、人々が彼ら自身と他の人々をどのように見ているかに関する概念構造の、公共的な象徴形態（言葉、イメージ、制度、行動）の分析による研究として「人の概念」を理解する。他者の思考を「感情移入（エンパシー）」という、結局は西洋的な人の概念の枠組みに他の人々の経験を押し込め

ようとする試みに他ならない方法によらずに、人々がそれによって世界を理解する象徴形態を分析することは、彼の目指す文化の科学に至るために必要な手段であった。彼はそのために思考は頭の中で生起する神秘的なプロセスではなく本質的に公共的な活動であるという論点を強調している。特定の時間における特定の社会の成員によって把握される、意味あるものとしての人の経験の構造を描写し分析する方法を、彼は「文化の科学的現象学（a scientific phenomenology of culture）」（Geertz 1973:364）と呼ぶ。

彼は、このように定義される方法によってジャワ、バリ、モロッコの「人の概念」を分析している。ここではバリの事例だけに触れておく。バリの人の概念は、一言で言うならば「演劇主義的」である。つまり、「バリにおいては、個人の表現するもののあらゆる側面を様式化しようとする恒常的かつ体系的な試みがあり、個別的なもの、すなわち人がその肉体と心を人生ゆえにそうなったというただそれだけの理由でその個人の特徴として持つようなものはおしなべて、バリの生そのものとして永続し決して変わることがないとされる見世物（ページェント）の内に、居場所を割り当てられて沈黙させられるのである。存続するのは役者ではなく演劇的ペルソナであり、事実、しかるべき意味で現実に存在するのは役者ではなく演劇的ペルソナである」（ギアツ 1991(1983):109）。このような特性は、経験的に観察可能な象徴形態を通じて認識される。まず名称体系がある。バリには複雑な名称体系があり、それらの使用はひとを規格化された地位を占める存在として強調し、個人的特異性を押し隠す。また、バリのカレンダーは時間の流れよりもその日その日の質的特徴を強調する。そして相互行為は、「舞台であがること（stage fright）」と訳されるレク(lek)の観念にあらわされているように、人の文化的位置が要請する公的な演技に対する関心によって特徴づけられる。レクとは、ギアツによると、「個人の個人性—われわれはそう呼ぶが、そのようなものを信じないバリの人々はもちろんそのようには呼ばないであろう—が噴出して、標準化した公のアイデンティティが消え去ることに対」する恐れである（ギアツ 1991 (1983): 112）。これらの支配的な文化的装置が互いに支えあうことによって脱人格化された人格という逆説が達成される。

3・3　その批判

プール（Poole, Fritz John Porter）（Poole 1994）は、ギアツの立場を批判する。分析において、人格と自己の概念をしばしば一まとめにし、混同し、あるいは同意と見なしているというのである。確かに、次のような一節で少なくとも用語上人格と自己は区別されていない。

「私が詳細に調査した三つの社会、すなわちジャワ、バリ、モロッコにおいて私がとりわけ興味を持ってきたのは、その社会に住む人々が自分自身を人（person）としてどのように定義するかを見定める試み、すなわち、ジャワ式、バリ式、モロッコ式の自己（self）とは何であるかについて人々自身が持つ観念（ただし、持っていることをうっすらとしか気づいていないというべきであろう）は、どのへ

んに関わってくるのかを見定める試みであった。」(ギアツ 1991 (1983): 103)

では、理論的レベルではどうだろうか。上に見たように、「バリの人々がそれらを通して個々のひとを定義し、認識し、ひとに反応する、要するに人について考えるための文化的装置」(Geertz 1973: 360)、ここでは名称体系、カレンダー、感情の用語が検討されている。よって、ここで考察されているのは「法と公共的イデオロギー」の問題ではなくて行為者の経験の問題であるのだが、この「経験」は、他者の意識に直接問われたものではなくて、象徴によって介在された経験である。このように理解された、公的な象徴パターンの読解による他者の主観性についての具体的な記述は、時に読み手を戸惑わせる。

個人の特異性を抑圧し人を非時間的な地位カテゴリーの一時的な占有者とする名称体系の説明の中で、曾祖父と曾孫に対する名称が同じであり、「二つの世代は、そしてそして両世代を構成する個々人は文化的に同一である (culturally identified)」(Geertz 1973:374)と書くとき、それは単に同じ名だという意味なのか、それとも「同一視される」という意味で書いているのか。個人の特異性の表出を妨げる社会的相互行為の儀礼化について、「個人の個人性」を「われわれはそう呼ぶが、そのようなものを信じないバリの人々はもちろんそのようには呼ばないだろう」と言う時、「信じない」という言葉をどう理解すればよいのか。瑣末に見えるが、このような記述の問題は、全体的モデルをどのように構想するかの問題に直結している。

そして、実際バリの人格と自己の概念についてウィカン(Wikan, Unni) (Wikan 1987) が、より一般的に理論的枠組みについてスパイロ (Spiro, Melford E.) (Spiro 1993) が、批判している。

ウィカンの議論は、ギアツによるバリの人の概念解釈の批判であり、もう一つの解釈の呈示である。ウィカンはバリ人の「黒魔術」に対する恐れの感情の分析によって、ギアツが「演劇的」と形容する、個人的特異性を抑圧して相互行為を社会的役割の儀礼的上演へと規格化するバリ的人の概念の「下に」、個人的思考と他者の意図(とりわけ悪意)に対する非常な興味があると論ずる。バリ人の明朗で滑らかな感情の標準化された呈示は、実は、危険な黒魔術その他の社会的制裁を呼ぶ結果となる否定的感情と振る舞いを隠蔽し、読み取られないようにするための手段である。「パブリックな洗練とプライヴェートな恐れ」は、「上演された」感情と「感じられた」感情、自己呈示と防御された自己として行為者自身に認識されている。ギアツの文化概念の分析は、社会的出来事の流れの中で経験されるリアリティ、「本当に彼らが経験しているのは何なのか」を逃してしまうのだ、とウィカンは論じる。

スパイロ (Spiro 1993) は、ウィカンをはじめとするアジアの事例を援用しつつ、西洋の自己の概念を「特異 (peculiar)」とする、非西洋の自己概念をそれとは対照的なものとして描く研究を批判する。ここでギアツは他の、理論的立場の異なる研究者たちとともに特異性の主張者として批判されている。スパイロによるとこれら影響力を持つ研究では、「自己」の概念の定義が曖昧であり、方法論的にも

不十分であるため、結果としての、エゴ中心的で独立して自律的な西洋的自己と社会中心的で相互依存的で文脈依存的な非西洋的自己を対立させる二分法は不適切である。従来「非西洋型」と言われてきた社会についての近年の研究成果は、これらの社会に独立した自己の概念が存在することを教えるという。

スパイロの議論によると、ギアツは文化的象徴の分析「のみ」に基づいてバリの自己概念を描き出した。このようにして得られた自己の概念は規範的な文化的概念であるにもかかわらず、バリ人による自己表象そのものと同一視した。しかし、両者は同じではない。「行動の観察と心理的探求」によるウィカンの研究は両者の間のずれと対立の存在を明らかにしている。仮面の裏には私的自己があるのである。西洋については逆がいえる。規範的概念が「個人主義」であっても実際の自己表象がそれに同型であるとは限らない。むしろ多くの心理学的研究が指摘する通り、自己の経験は「相互依存的」でありうる。

スパイロは「自己呈示」と「自己表象」(行為者自身の「自己の感覚」)、規範と経験のギャップを強調する。彼の狙いは、西洋と非西洋の極端な二分法の解消であった。非西洋は「特異性」の論者が述べるほど社会中心的で文脈依存的ではなく、西洋は個人中心的で文脈独立的ではないというわけである。

このように、ギアツの研究は規範的文化概念の記述であると理解され主観的経験は別のレベルに設定される。この理論的モデル化は、人格と自己を対置する二重モデルへの形を変えた回帰である。

3・4 二重モデルへの回帰

議論は、人類学は他者を時間から切り離された静的な世界で文化に従って生きる存在として描き出してきた、社会変化と人々のエージェンシーにより注目しなくてはならないとするよりひろい人類学批判に動機づけられていた。

例えば、「人の概念とエージェンシー：アフリカ諸文化における自己と他者の経験」(Jackson and Karp (eds.) 1990)と題された論集はフォーテスの枠組みを継承することを明言し、文化的思考のモデルと生きられた経験の弁証法的関係を追及している。編者によると、人格の概念化は、法的なものであれ規範的なものであれ、人の「経験」の広がりを押さえようとしてこなかった。「形式化した人の概念は静的で予定された社会的世界の描写ではない。過去から継承された価値と目標と今ここにおける人々の社会的存在を構成する様々な問題と緊急事態が適合するような世界を構築し再構築するために人々が活動的に用いる手段なのである。」(Jackson and Karp 1990: 28)ここでは、自己の経験、欲求、自由と対置される文化的概念の道具性がより強調される。

このように理解された人格についての文化的概念と自己の経験の関係が所与の社会内でどのようにどのように構造化されているかのモデルを探求するものもある。マジオ(Mageo, Jannette Marie) (Mageo 1995)は、サモアの事例について存在論的前提と道徳的言説、区分けする言説、戦略的言説の三つの言説実践を区別することでこれを試みている。マジオによると、存在論的前提としてのサモアの

人の概念は、人は役割を演じる存在であるというものであるが、この前提では人の経験すべてをカヴァーすることができない。存在論的前提はふるまいの善し悪しを判断する道徳的言説のかたちで規範として働く。道徳的言説によって抑圧された自己の側面は、公式的なコンテクストと非公式のコンテクストでの語りの使い分け（区分けする言説）にあらわれる。非公式なコンテクストで、サモア人はまるで行為者の社会的地位の差異がないかのように振る舞い（道徳的に悪とされる）を行なうのである。また、伝統的価値の遵守や集団のための行為を装いつつみずからの政治的目的を達成しようとする言説、「戦略的言説」によっても「道徳的言説」によっては捉えられないが暗に認められている自己性が表現されるとマジオは論じる。ここで、「人の概念」の文化的モデルは、道徳的規範に切りつめられ、個的経験の表出を圧迫し、役割へと還元する存在であると理解されている。それに対して、人々は、公式の場面と非公式の場面に応じた言説の使い分けや、文字通りの意味と隠された意図の区別によって、私的な経験を表出するとされる。

3・5　二重モデルのもう一つの形

このモデルのもう一つのヴァリエーションは、規範的な人の概念に対して自己意識ではなく、実践的で微視的な「政治」を対置する。アブルゴッド（Abu-Lughod, Lila）はエジプトのあるベドウィン社会で顕著な二つの感情―用語の相互関係の分析を行なう(Abu-Lughod 1990)。その二つとは謙遜（modesty）、当惑（embarrassment）、恥(shame)と訳しうるハシャム（Hasham）と愛の感情である。アブルゴッドは、ハシャムは父系制親族システムに基づいた社会秩序に適合した感情であり、そのヒエラルキー的権力構造とその再生産にあった道徳性を押し付け、違反を規制することを示す（33-35）。恋愛詩のかたちで詠まれる「愛」の感情表出は、この支配的な感情の構造＝社会構造に対する、文化的に基礎付けられた「抵抗」であると解釈する。しかし、ここでハシャムと愛の関係は、社会的拘束に対する個人の自由、あるいは倫理的＝社会的制限と個人的表現というかたちで図式化されない、と彼女は言う。なぜなら恋愛詩はベドウィンの民族的独立性を主張する文脈では肯定的に捉えられる文化的実践であるからである。しかし、たとえ政治的意図を同定できなくても、愛の詩における愛の感情表出は政治的行為、あるいは政治的声明であるとアブルゴッドは主張する。支配的な社会構造＝感情の構造を危険にさらし、撹乱するからである。

この議論は「文化化された」人格と自己の二重モデルに準ずるかたちを取っている。つまり、規範的な社会的役割関係とそれを制御する感情のシステムに対して、文化的に構築された「愛」が置かれ、両者の関係が服従か抵抗かの政治的関係とされる。特徴的な違いは、愛の表出がいわば「意図なき抵抗」とみなされている点である。ここで愛は自己の経験であるのみならず、支配的な社会秩序に対する反乱の実践的なあらわれであると解釈される。「内的意図」は想定されない。しかし行為は抵抗として特徴づけられる。ここでもまた規範的人格とその対立物の政治的相互作用が想定されている。

3・6　「文化化された」人格と自己の二重モデル

この理論的スタンスが従来の二重モデルに対して異なる点は、アンドリュー・ストラザーン(Strathern, Andrew)(Strathern 1998)の指摘する通り、個人が社会の外部にある力として設定されず、規範的人格と自己経験をともに文化的に構成されるものとみなす点である。例えばウィカンは公的領域が文化的であり、私的領域が個人に特異であると見なすことを安易であると否定する。なぜなら、「文化は感情の組織化の核と自己の構築にまで侵入し、内的経験を文化的にかたどられたパターンに基づかせるからである」(Wikan 1987: 349)。モデルは複雑化する。フォーテスでは、自己は社会的な人格の外部にある普遍であった。「文化化された」モデルでは人格は文化的に構築されている。自己経験もまた。そして両者が社会生活において交渉的関係にあると見なされる。[注2]

3・7　問題点

これらの二分法の再導入は、別の二分法、西洋対非西洋のそれを緩和・解消するための矯正法として論じられた。主体的西洋に対する非主体的な非西洋という単純で強固な二分法は、主張されてきたほど極端ではない。その主張の方策として再導入されたのが、人格／自己の二重性であった。

問題は、二重性が一般化されている点である。規範と行為者の対立は、その民族誌的装いにもかかわらず、多くの場合、モデルから演繹して求められる。これは、既に見た通り、エージェンシーの重要性が、本質的に先行する理論的枠組みに対する批判として構想されたからである。社会的な人格が規範的に働くとすれば、内面、社会的重圧、服従といった点が相互的な行為、解釈、反応の流れの中で、あるいは再帰的な行為の特徴づけにおいてどのようにあらわれるか。この点がしばしばないがしろにされている。実践的抵抗の理論は内面性を回避しつつも文化的行為を政治的行為と特徴づけることで同じ罠にはまっている。

ただしこの点について、ウィカンは出来事の流れの中で、逆境の中でのふるまいの「優美さ」や感情の「朗らかさ」の「下に」呪術に対する「恐れ」や「悲嘆」が読み込まれていく社会的過程を事例で示している。内的意図の推論や感情への関心が相互行為を特徴づけていると分かる。ここで、規範性は社会的レベルで上演されている。この点で、ウィカンの議論はギアツに対する矯正として機能している。

しかし、彼女の解読が理論的モデルとして敷延された時、妥当性は疑わしくなる。多くの社会的過程の中に個人的意図の推論に基づく相互行為があるという観察と、社会的過程とは文化的概念と生きられた経験の間の交渉であるという理論的定式化の間には大きな隔たりがある。行為を私的意図へ帰する理解がある（ないような社会は考えにくい）、あるいは支配的であることは、そのような「超越的自己」がア・プリオリに想定されていることを示さない。

「文化化された」人格／自己の二重モデルは、理論的に定式化された時、ロサルドの示したようなモデルと真っ向から対立する。前

に見たように、彼女が批判するのはまさにこのような理論的枠組みであるからである。こうして、議論は隘路に入ってしまう。しかし実際は、ある社会内において、内的意図への強い関心は、それに反する行為の理解と完全に相互排除的であると考える理由はない。このような対立の絶対化は、ある単一の枠組みが社会全体を安定してカヴァーしているという幻想から起る。この視点を解除するために自己および人格を既に出来上がった、与えられたものと見なす観点を括弧入れし、その上で個別状況を分析しうる手段を模索しなくてはならない。

4　自己の修辞的構築

4・1　自己の修辞的構築

全体的モデルを括弧入れし、より限定された主題を再検討しようとする試みがあらわれている。ここではすでに自己と人格の全体的コンフィギュレーションについては語り得ず、試みは限定的となる。しかし、二重モデルや実践的抵抗の理論に対する批判としての価値を持っている。

バタグリア（Battaglia, Debbora）らは、「自己製作の修辞（Rhetorics of self-making）」と題された論集で、「自己」は安定した「生産物＝出来上がったもの」であるという考え方から離れ、異なった文化的状況によって変動する自己の概念の不安定な状態を捉える視点を提出している。バタグリア（Battaglia 1995）は、自己の概念は安定不変ではなく、文化的にかたどられた相互行為の流れの中で実現されるものであり、状況に応じてある形の想像的秩序をもたらす常に不安定な生産過程である、とする(2)。この指摘は、前もって存在する、粉飾されるべき「自己」は想定できないという警告であり、したがって、自己（あるいは非自己）が製作される修辞的行為の過程を分析すべきであるという方法の提案である。「文化化された」二重モデルでは、自己は既に出来上がったモノと捉えられるため、社会的過程の中での個人的意図や感情への関心はそのモノの「表現」「呈示」と見なされる。それに対して、「自己製作の修辞」のアプローチは生成の場に踏みとどまることによって図式への還元を避けようと試みる。

このアプローチはエージェンシーの位置づけを問題化する。主体は必ずしもその行為の意識的中心、経験の座とは見なされないからである。自己＋行為はそこからはなれた主体に生起しうる。行為する「主体」は不変的に必ずしも意識的にその自己性の経験と認識、あるいは装われた彼(女)の感覚の源というわけではない(4)(Cf. Strathern 1988)。[註2]

4・2　アンチ・パーソナリスト

スピーチ・アクト理論の西洋中心主義に対する批判である、アンチ・パーソナリストと呼ばれる一連の研究も同様の関心が、より言語に注目した形であらわれる。ヒル（Hill, Jane H.）とアーヴァイン（Irvine, Judith T.）は「責任あるエージェンシーの割り当ては、創造

的な解釈プロセスと見なしうる。このプロセスは解釈された行動の取る象徴形態、その社会的環境、その文化的マトリクス、そして証言の動機と知識によっている」(4) とし、意図と責任の分配の分析を行なう。同論集でデュランティ (Duranti, Alessandro) (Duranti 1993) は、事例として伝統的サモア村落の会議における、フォノ (fono) と呼ばれる演説を分析している。このような場において、雄弁家 (orater) の発言は、発話時の彼らの心理的状態や意図によって判断されず、発言がもたらした結果と関連して判断されると、デュランティは主張する。その意味で、フォノの発話は「意図なき責任」であるといえる。雄弁家は、首長 (位の上の人) のためにしゃべるとき、メッセンジャーであるにもかかわらず発話の帰結に対する責任を負う。デュボワ (Du Bois, John W.) (Du Bois 1993) はデュランティと異なり発話者に「意図も責任も帰されない」ト占の発話を分析する。彼の分析するト占の意味生成過程においては話者の意図は読み取られないし、また、ト占の内容に対して責任も負わない。確かに、占者には正しい儀礼的手続きに従おうとする意図や儀礼的に規定された言葉を正確に発話しようとする意図が認められる。しかし、それらは特定の託宣の発話内容に対する実践的な後ろ盾 (pragmatic backing) を提供するような意図ではない。その点に関しては、発話者は他のエージェンシーの代弁者に過ぎず、この点については責任を負わないのである。アンチ・パーソナリストはこのように、内的意図があらゆる局面で常に存在するという想定を批判する。

クソルダス (Csordas Thomas J.) (Csordas 1997) は、アンチ・パーソナリストの批判を評価しつつ、その不備を指摘する。そして、アメリカのカソリック・カリスマティック・リニューアル (Catholic Charismatic Renewal) と呼ばれる宗教運動の預言の分析によって、「矯正の矯正」を行なおうとする。クソルダスによると、意図、責任、発話のコントロールに関連する人類学者の批判は、個人的発話者の意図を普遍的に意味生成の過程の中心に位置付ける説明に対する重要な矯正となってきたが、同時に、主観的意図によって特徴づけられる西洋の発話者と集団的決定によって特徴づけられる非西洋の発話者との二分法的分割へと陥る危険があった。それを矯正するためには、次の二つの問題を認識しなくてはならない。すなわち、①アンチパーソナリストの多くは、強固に形式化され、自発性の発揮の可能性の少ない固定されたテクストの上演を扱うジャンルとしてきた。儀礼言語、ト占、起源神話、先祖の言葉などである。②「意図なき意味」の理想形として選択される主観的状態は、日常的な自覚的発話の対極にあるトランスである。この背後には、日常的自己は主観的でエゴ中心的な西洋的自己のモデルにしたがって作られているのに対して非日常的な自己はトランスした社会中心的非西洋的自己となるという考えがある。この考えでは、話者はトランスを偽装して日常的自己を維持するか、トランス状態に入ったもう一つの自己が固定されたテクストの上演を行なうかするしかないという理論的行き止まりに陥る。

それに対してカリスマ的預言は起源神話の語りのように固定され

たテクストのジャンルでもないし、トランス状態において非日常的自己に取って代わられる日常的自己を想定するようなジャンルでもない。預言の発話は「私」が神である一人称の発話であり、話者である人間は単なる神のスポークスマンでしかない。しかし、この預言は「意図なき意味」ではない。なぜなら預言者はみずからの言葉が真に神によってインスピレートされたものかそれとも悪魔や自分の感情によって動機づけられているのかを見分けるために意識を研ぎ澄ませているからである。だが、それでもなお発話が聴衆によって聖なる言説として究極的な権威を認められる限りにおいて、それは議論の余地のない神の意志の声であるとみなされる。クソルダスは、預言がこのような「二重化された主観性」によって特徴づけられる、という。話者は「本当には」話していないにもかかわらず、自分の言うことに対して責任を負っていると意識しているのである。

このような「聖なる自己」は粉飾された自己、単なる自己呈示とはいえない。預言は話者の隠された意図に還元されず、聴衆と間主観的に構築される真正の神の意図が認められるからである。クソルダスはこの事例は君臨する意図的なエゴの権威をアンチ・パーソナリスト的批判と同様に脱中心化するとともに、欧米の文脈における間主観的な意味構築の格好の民族誌的事例を提供し、西洋と非西洋の二分法を緩和すると述べている。

言語人類学的アプローチは人格と自己の問題の一つの中心である意図と責任の分配について、より接近した、限定されているが理論的興味は大きい議論を提起してくれる。クソルダスの事例に見られるように、二分法の解消のために再び主体性の理論を導入する必要はない。デュランティとデュボワもそれぞれ注意するように、アンチ・パーソナリストの主張は当該社会に内面的意図の賦与がない、あるいはそれが重要ではない、ではなくそれが唯一の筋道ではない、である。この議論は私的自己と公的人格の「理論的」前提に対立しているのであって、内的意図そのものに対してではない。西洋／非西洋の対立は一般化された主体性の再導入ではなく、文脈化された自己の構成プロセスへの注目によって緩和される。

5　おわりに

近年の人類学の理論的傾向、つまり主体性の回帰を顧みるならば、上に見たような人のエージェンシーの曖昧化への執着は、奇妙で、反動的とさえいえるかもしれない。しかし、現時点では断片的なものとどまっているとはいえ、エージェンシーの修辞的構築についての民族誌的試みの成果は、ロサルドらが切り開いた地平がはやばやと撤退されるべき性質のものではないことを示している。全ての人に出来合いの主体性や実践的抵抗の性質を与えて贖罪されたと信じるよりも、「内的自己とは単に識別された沈黙である」とするロサルドのラディカルな想定に踏みとどまるべきだろう。どのような語りが内的自己とその呈示の落差を創り出していくのか、あるいはいかないのか。どのような社会的相互行為のプロセスによって主体性があらわれ、あるいは曖昧化されるのか。これらのプロセスに現れる

語りの多様性を読み解くことが、我々の課題である。

以上のように、本稿は人格と自己という概念の組に焦点を当てて理論的な流れを整理し、理解しようと勤めてきた。しかし、より包括的な理解のためには、これだけでは十分ではない。人の概念についての人類学的語りを形作っている他の諸概念も検討しなくてはならない。最後に、特別な探求を必要とするだろう問題を二つだけ掲げておく。

個人と非個人。個人(性)・個人主義と、非個人(性)・関係性・分割性(dividuality)・全体主義と様々に呼ばれるその否定の対立は、時に自己と人格の対立と同一視され、時には異なった対立軸と捉えられつつ存続してきた。個人／非個人対立は、陰に陽に、すべての研究者にとってなくてはならない概念的対として考えられてきた。言い方を変えれば、この対立は、その外側に出てしまえば人格と自己の人類学的研究が意味を成さなくなるような限界としてあるように見える。

意図—責任と倫理的相対性の問題。意図—責任問題は、人の概念の人類学という研究枠組みの中では、社会構造内における相互の位置関係によって流動的に変化する(つまりキリスト教倫理のように絶対的ではない)道徳性についての議論と組み合わされていた(e.g. Read 1955)。ロサルドにおいても、人格のコンテクスト依存性と行為と意図の問題は並置されている。だが、近年これら二つの問題は遊離する傾向にあるように思われる。バタグリアはエージェンシーの位置づけの問題と個人性と関係性(relativity)のレトリックの問題を区別している(Battaglia 1995)。またストラザーンとスチュワート(Stewart, Pamela J.)は、一方で「責任の体現」というタイトルのもとに、パプア・ニューギニアのメルパ(Melpa)の人々について内的意図と責任の、身体の問題へのスライドを論じており、他方では、「人格を求めて」で親族関係を拡張することで逆説的に自己を実現する、言い換えれば、関係性によって個人性を達成するメルパの人々について論じている(Strathern and Stewart 1998a, 1998b)。もちろん人類学者は両者の関わりの探求を放棄したわけではまったくない。例えばデュランティは社会的ヒエラルキーと発言の責任との相互関係を重視している。しかし、クソルダスの例が示すように、意図と責任の問題は社会的紐帯の問題に従属はしていない。

これらの点について整理し、解読していくことによって、人の概念の人類学的研究に賭けられているのがなになのか、より明確に捉えることができるだろう。

注

(1) 同時に、自分が他者とは異なっているというパーソナル・アイデンティティの感覚を持つという限定された意味においては自己は普遍的であると述べている。

(2) ハリス(Harris, Grace Gredy)はこのような、それぞれの概念が独立して文化的に構築されているとする立場をモデル化している。彼女は自己と人格、および個人の分析概念を明確に区別すべきであるとする(Harris 1989)。彼女によると、個人は生物学的な人間

種の一員としての存在の概念である。自己の概念とは、「その人自身の「誰かであること」についての経験を含む、経験の生起する場としての人間存在の概念化」(601) である。よって研究は、このように定義された自己が社会の中でどのように概念化されているか探ることにある。それに対して、人格の概念の研究は、エージェント、目的へと意識的に向かう行為の著者としての人間、あるいはその他の存在（死者、動物その他）の概念化を取り扱う。この意味において人は社会秩序の中に社会内エージェント (agent-in-society) として位置づけられている。人であることとは、行為と認められるふるまいの書き手としての「誰か」であることを意味する。人類学者は、このようなエージェンシー能力の社会的分配を、社会内のソーシャル・カインド (social kind) の構造的分配と、個人のライフ・コースの中での継起的保有という二つの繋がった観点から理解できる。

(3) カークパトリック (Kirkpatrick, John) とホワイト (White, Geoffrey M.) (Kirkpatrick and White 1985) もまた、個人的動機の構築が行動の組織化の座となるような人格のモデルを批判し、エスノサイコロジーすなわち「人のアイデンティティ、行為そして経験についての文化的理解」を探求する。彼らが特に焦点を当てて分析するのは「人格、人の行動と経験の文化的定式化と、そのような定式化を社会生活において伝達する相互行為的実践」(9) である。

参考文献

ギアーツ、クリフォード 1991(1983)『ローカル・ノレッジ－解釈人類学論集』梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美訳 東京：岩波書店

デュモン、ルイ 1993(1983)『個人主義論考：近代イデオロギーについての人類学的展望』渡辺公三・浅野房一訳 東京：言叢社

レーナルト、モーリス1990(1947)『ド・カモ：メラネシア世界の人格と神話』坂井信三訳 東京：せりか書房

Abu-Lughod, Lila 1990 "Shifting politics in Bedouin love poetry" in Lutz, Catherine and Lila Abu-Lughod (eds.) 1990 Language and the politics of emotion, Cambridge: Cambridge University Press, 24-45

Allen, N. J. 1985 "Category of the person in Mauss" in Carrithers, Michael Steven Collins and Steven Lukes (eds.) 1985 The category of person, Cambridge: Cambridge University Press, 26-45

Battaglia, Debbora (ed.) 1995 Rhetorics of self-making, Berkley and Los Angeles: University of California Press

Battaglia, Debbora 1995 "Problematizing the self" in Battaglia, Debbora (ed.) 1995 Rhetorics of self-making, Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1-15

Carrithers, Michael 1996 "Person" in Barnard, Allen and Jonathan Spencer (eds.) 1996 Encyclopedia of social and cultural anthropology, London: Routledge, 419-422

Csordas Thomas J. 1997 "Prophecy and the performance of metaphor" American Anthropologist 99(2), 321-332

Duranti, Alessandro 1993 "Intentions, self, and responsibility: An essay in Samoan Ethnopragmatics" in Hill, Jane H. and Judith T. Irvine (eds.) 1993 Responsibility and evidence in oral disourse. Cambridge: Cambridge University Press, 24-47

Du Bois, John W. 1993 "Meaning without intention: lessons from divination" in Hill, Jane H. and Judith T. Irvine (eds.) 1993 Responsibility and evidence in oral disourse. Cambridge: Cambridge University Press, 48-71

Fortes, Meyer 1993(1973) "On the concept of person among the Tallensi" in Dieterlen, Germaine (ed.) 1993(1973) La notion de personne en Afrique noire, Paris:L'Harmattan, 283-319

Geertz, Clifford 1973 "Person, time, and conduct in Bali" in The interpretation of cultures, New York: BasicBooks, 360-411

Harris, Grace Gredy 1989 "Concepts of individual, self, and person in description and analysis" Amrerican Anthropologist 91, 599-612

Hill, Jane H. and Judith T. Irvine (eds.) 1993 Responsibility and evidence in oral disourse. Cambridge: Cambridge University Press

Hill, Jane H. and Judith T. Irvine 1993 "Introduction" in Hill, Jane H. and Judith T. Irvine (eds.) 1993 Responsibility and evidence in oral disourse. Cambridge: Cambridge University Press, 1-23

Jackson, Michael and Ivan Karp (eds.) 1990 Personhood and Agency: The experience of self and other in african cultures, Uppsala Studies in Cultural Anthropology 14, Uppsala:University of Uppsala

Jackson, Michael and Ivan Karp "Introduction" in Jackson, Michael and Ivan Karp (eds.) 1990 Personhood and Agency: The experience of self and other in african cultures, Uppsala Studies in Cultural Anthropology 14, Uppsala:University of Uppsala 15-30

Kirkpatrick, John and Geoffrey M. White 1985 "Exploring Ethnopsychologies" in White, Geoffrey M. and John Kirkpatrick (eds.) 1985 Person, self and experience: Exploring pacific ethnopsychologies, Berkeley: University of California Press 3-32

Mageo, Jannette Marie 1995 "The reconfiguring self" American Anthropologist 97(2), 282-296

Mauss, Marcel 1950(1938) "Une categorie de l'esprit humain: La notion de personne, celle de "moi"" in Sociologie et anthropologie, Paris:PUF 331-362

Poole, Fritz John Porter 1994 "Socialisation, enculturation and the developpement of personal identity" in Ingold, Tim (ed.) Companion Encyclopedia of Anthropology: Humanity, Culture and Social Life, London and New York: Routledge 831-860

Read K. E. 1955 "Morality and the concept of the person among the Gahuku-Gama" Oceania 25(4), 233-282

Rosaldo, Michelle Z. 1984 "Toward an anthropology of self and feeling" in R. Sweder and R. Levine (eds.) Culture theory: Essays on mind, self and emotion, Cambridge: Cambridge University Press, 137-157

Spiro, Melford E. 1993 "Is the western conception of the self peculiar within the context of the world cultures?" Ethos 21, 107-153

Strathern, Andrew 1998 "Garder le corps à l'esprit" in Godelier, Maurice and Michel Panoff (eds.), La production du corps: Approches anthropologiques et historiques, Amsteldam:Editions des Archives Contemporaines 63-79

Strathern, Andrew and Pamela J. Stewart 1998a "The embodiment of responsability: "Confession" and "compensation" in Mount Hagen, Papua New Guinea" Pacific Studies 21(1-2), 43-64

Strathern, Andrew and Pamela J. Stewart 1998b "Seeking personhood: Anthropologicalaccounts and local concepts in Mount Hagen, Papua New Guinea" Oceania 68, 170-188

Strathern, M. 1987 "Introduction" in M. Strathern (ed.) Dealing with inequality: Analysing gender relation in Melanesia and beyond. Cambridge: Cambridge University Press 1-32

Wikan Unni 1987 "Public grace and private fears: gaity, offence, and sorcery in Northern Bali" Ethos 15:337-365

Concepts of Person and Self in Anthropological Work

NAKAGAWA Osamu

This paper examines the theories of personhood in anthropological writings. Especially, we focus on a pair of notions that are person and self. These two notions have given and continue to give a framework necessary to make diverse ethnographical studies intelligible. We try to ferret out this discursive framework and to find out actual possibility of anthropological study of person and self.

The author submits three phases in the development of theory as a trial, to grasp clearly the points at issue. (1) The "dual model" which opposes social person to psychological self vs. Michelle Rosaldo's critique which claims that this analytic framework is not universally applicable. (2) The interpretive approach to personhood by Geertz and Rosaldo vs. the critique against it, which argues that they in fact describe the normative cultural conception, not the experience of the self by natives. But this critique is revealed to re-introduce newly-fashioned "dual model". (3) The enterprises that try to seize selfhood as a chronically unstable productivity and to analyze cultural processes in which the responsible agency is attributed. This critical approach remains to be experimental. However, it is remarkable as an attempt to overcome both West-and-the-rest dichotomy and the essentialism of inner self.

Key Words

person, self, experience, agency, antipersonalist approach